

宮臨技学術部 研修会報告書 平成 28 年度 作成者 佐藤 しげみ	
研修会名	平成 27 年度精度管理病理部門 フォローアップ研修会
担当分野	病理部門
開催日時	平成 28 年 5 月 7 日 (土) 14:00~17:00
開催会場	宮城県立こども病院 愛子ホール
参加人数	会員 34 名、非会員 0 名、 合計 34 名
研修内容 (感想を含 めて)	<p>1. 平成 27 年度病理部門精度管理調査報告・検討 演者：宮城県対がん協会がん検診センター 佐藤 しげみ技師 宮城県立こども病院 高崎 健司技師</p> <p>佐藤技師から平成 27 年度病理部門精度管理調査「ヘリコバクター・ピロリ染色」について、宮臨技の報告会での報告内容に加えて、異物混入のため再染色を依頼した施設の再染色結果と異物混入理由についての報告。</p> <p>引き続き、精度管理評価時に評価員より出された検討課題「免疫組織化学染色の染色性」について佐藤技師より報告。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・免疫組織化学染色においてピロリ菌染色は、施設間差がかなり認められた。菌体以外に粘液が染色されていたのは、一次抗体の本来持っている反応特性であり、非特異反応ではない。 <p>ピロリ菌の染色性は、抗原賦活化の方法によって異なり、プロテアーゼ処理よりも加熱処理の方が濃く染色された。</p> <p>菌体の観察には、プロテアーゼ処理の方が適しているが、「弱拡で菌体を確認しやすくしてほしい」という病理医の指示によりあえて加熱処理を行っている施設もあり、精度管理の難しさを感じた。</p> <p>また、最近話題の「ヘリコバクター・ハイルマニイ菌」の症例報告があった。</p> <p>検討課題「ギムザ染色の染色性」について高崎技師より報告。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・精度管理の染色内訳で 13 施設 (54.2%) とギムザ染色が最も多かった。今回、評価の高い施設と評価の低い施設のプロトコルを比較検討し、「ピロリ菌染色に適したギムザ染色」の報告があった。 <p>ピロリ菌は、染色液の pH によって染色性に違いを認め、酸性で染色性が弱く、アルカリ性で染色性が強くなる。</p> <p>分別の検討では、分別を行わないと粘液が共染し、過剰に分別を行うと菌体の染色性が低下し観察が困難になる。</p> <p>脱水液の検討では、イソプロピルアルコールの方がエタノールと</p>

	<p>比較して染色性が保持された。</p> <p>血液塗抹標本を染色する場合と目的の違いを理解する事ができ、ピロリ菌染色に適したギムザ染色の知識を得た。</p> <p>2. 「H. pylori と病理組織診断について」</p> <p>演者：仙台医療センター 病理診断科 櫻田 潤子先生</p> <p>平成 27 年度病理部門精度管理調査の総評、H. pylori 感染症の病理組織を中心にご講義いただいた。H. pylori 感染症の病理組織を理解することは、標本作製する上で大切なことであり、日常業務に大変役立つ内容だった。また、H. pylori 判定の標本作製に関して病理医の立場から技師に望むこととして、「検体処理前」「標本作製の際」「標本作製後」「診断終了後」各々について注意点を伺うことができた。特に「診断終了後に病理医に見やすい標本であったか、好みの染色法はあるかなどを尋ねてほしい」と話されていたことが、適切な標本作製に一番必要なことだと感じた。</p> <p>3. 「ヘリコバクター・ピロリ感染症 ～臨床の立場から～」</p> <p>演者：大崎市民病院 消化器内科科長 大矢内 幹先生</p> <p>普段見ることのない内視鏡所見を中心にヘリコバクター・ピロリの関連疾患、ピロリ菌感染の診断方法、除菌治療についてと幅広い観点からご講義いただいた。</p> <p>萎縮の進行程度を「木村竹本分類」に基づいて、詳しく内視鏡写真で説明していただき、「幽門前庭部大彎と胃体上～中部大彎」からの生検組織採取の意味を理解することができた。</p> <p>ピロリ菌感染と関連性のある疾患「胃MALTリンパ腫」「過形成性ポリープ」「特発性免疫性血小板減少性紫斑病」の除菌効果を詳細に説明していただいた。今後、除菌により胃がん罹患率は減少すると予想されるが、「胃がんがなくなる訳ではなく胃がんリスクが減るだけである」という話に、除菌後がん検診を受けない人が増えている中、除菌後の経過観察の必要性を痛感した。</p>
<p>総括</p>	<p>大変活発な研修会が開催できた。県の報告会の補足のため、また精度管理事業自体が大変貴重な研修会の資料となりうるため、やはりフォローアップ研修会は来年度以降も継続していかなければならないと考えた。他施設との意見交換の場でもあり、なるべく多くの施設が参加するよう声かけが必要であると考えます。</p> <p>今回、会の運営に携わった実務委員をはじめ講師の先生方にも感謝いたします。</p>